

リディック (RIDDICK)

2004(平成16)年8月15日鑑賞<松竹角座>



監督・脚本=デヴィッド・トゥーヒー/製作=スコット・クループ、ヴィン・ディーゼル/
出演=ヴィン・ディーゼル/コルム・フィオーレ/ジュディ・デンチ/タンディ・ニュートン/
カール・アーバン/アレクサ・ダヴァロス (東芝エンタテインメント・松竹配給/2004
年アメリカ映画/118分)

……「リディック」とは、5つの惑星から指名手配をされているという設定の「お尋ね者」の名前。ここからわかるとおり、この映画はSF 超大作で、
○○星系、△△惑星を舞台としたややこしいものだが、登場人物のキャラクターはワリと単純！ 宇宙を夢みる小学生時代か、銀河系について興味を持つ年代が観れば、ワクワクするほど面白いのだろうが、55歳の私には、いくらSF 超大作でもちょっとマンガ的……？

リディックとは？

この映画のタイトルの「リディック」とは、5つの惑星から指名手配されている「お尋ね者」の主人公の名前。このリディックを演ずるのは、『トリプルX』(02年)への登場によって、一躍「肉体派俳優」として新たなヒーローとなったヴィン・ディーゼル。筋肉隆々の見事な肉体だが、この『リディック』ではさらに暗視可能な特殊な視覚をもったうえ、刑務所内で飼われている凶暴な動物クリーチャーまで懐柔させるという不思議な能力をもった人物。またこのリディックは、フューリア族の生き残りとのこと。

相手役は？

このリディックと対峙する相手役は、ネクロモンガー軍団を率いるロード・マーシャル (コルム・フィオーレ)。このロード・マーシャルは、「聖なる半死人」と呼ばれ、特殊な能力を身につけた人物(?)だし、ネクロモンガーは、あらゆる

る生命体の「浄化」を目的とする危険な軍団。すでに、9つの惑星を強大な宇宙艦隊の力で破壊したネクロモンガーたちが、次のターゲットと定めた星は……？

もう1人の不思議な人物？

映画にはもう1人、不思議な人物エレメンタル族の使者エアリオン（ジュディ・デンチ）という老女（失礼！）が登場する。彼女は、自然を司るエーテル体種族エレメンタルの使者。彼女は、ネクロモンガーの侵略を食い止める力を持つフューリア族の生き残りを探しており、リディックがその生き残りではないかと目をつけている。このようなわけで、とにかく人物像の設定からして、話はややこしい限り……。さて、あなたはわかるかな？

SF 超大作はとにかく難しい！

このように、主人公のリディックそして、その相手役のロード・マーシャルの人物（？）やその能力を理解するだけでも大変だが、それ以上に、「はるかな未来」の状況把握をするのも大変。まず、ネクロモンガーの攻撃の次のターゲットとされたのは、平和なヘリオン星系ヘリオン第1惑星。また、お尋ね者のリディックがひっそりと暮らしていたのはUV星系の氷の惑星。この惑星に、法外な賞金をかけられたリディックを探して、「賞金稼ぎ」がやってくる場所から物語はスタートだ。

さらに、後述のキーラ（アレクサ・ダヴァロス）が収容されている刑務所があるのは、惑星クリマトリア。何でもこの惑星は、昼は700度、夜はマイナス300度になるという、地表温度の激しい変化がおこる危険な惑星。その地下に垂直に伸びる「スラム」と呼ばれる監獄にキーラは収容されており、絶対に脱出不可能とされているとのことだ。

SF大作であることはまちがいない映画だが、あまりにもややこしい状況設定にちょっとウンザリ……？

2人の美女！

ややこしい話はさておき、この映画に登場する2人の美女を紹介しておこう。

その1人キーラは、リディックの「彼女」だが、かなりの美形。しかし、このキーラがクリマトリア惑星の刑務所に収容されているというから、話はややこしい。

もう1人は、ロード・マーシャルの忠実な部下で司令官をつとめているヴァーコ（カール・アーバン）の妻デйм・ヴァーコ（タンディ・ニュートン）。これはキャラクターがはっきりしていて面白い。つまり、ネクロモンガー軍団のボスであるロード・マーシャルの地位を奪おうとしてその夫をけしかけるといふ、いつの時代にもよくある権謀術策家の女性。

ややこしい話につっこんでいくとキリがないが、この2人の美女のパーソナリティや役割は、どこにでもあるお話なのでわかりやすい。

巨大なセットは美しいものだが……

最近の映画はCGが大はやり。この映画の戦闘シーンも、そのほとんどはCGで撮影されていると思われるが、あまりにもスピードが早く、どんな展開になっているのか正直よくわからない。また、さまざまな「決闘」の場面においても、せっかく肉体派のヴァイン・ディーゼルが主役となっているのに、肉弾相撃つという感じはほとんどなく、あまりにもつくりモノ的な闘いが多すぎる感じ。

また、巨大な都市や宇宙船も、そのほとんどはCGだろう。しかし、17世紀ヨーロッパの初期バロック様式をイメージしたというネクロモンガーの建物や、ロード・マーシャルが支配している宇宙船の母艦の巨大なセットなどは見事なもの。

色彩は独特のもので、あまり気持のいいものではないが、その装飾の美しさや天井の高さ、規模の巨大さには圧倒させられる。しかし、その中でくり広げられる、さまざまなストーリーはやっぱり少くせがすぎる……？

映画のコンセプトは実現しているが……？

この映画の監督・脚本はデヴィッド・トゥーヒーという人で、アドベンチャー、ファンタジー、ホラー、SF映画のジャンルを常に刷新してきた監督とのこと。たしかにこの映画は、今までの数々のSF映画大作のイメージを刷新しているものだ。

そして、パンフレットによると、そのデヴィッド・トゥーヒー監督が、プロダ

クションデザイナーのチームに命じたことはただ1つ、「どこかで見たことのあるものはボツにしろ！」ということだそう。たしかに、主人公たちのパーソナリティや惑星の設定の仕方からして、独創的なものだし、そのストーリー展開も、今までになかったものであることはまちがいない。その意味で、監督の狙いや、この映画のコンセプトは実現しているだろう。しかし、「壮大な銀河年代記の幕が開く」とパンフレットにうたわれているほどの、夢とロマンに満ちあふれた映画になっているかというところ……？

さて観客の反応は？

新聞広告などではかなりハデに宣伝されていたが、私が行った日曜日の夕方からの上映では、大きな映画館であるにもかかわらず、観客はごくわずか。これではちょっと前宣伝倒れ……？ やっぱ観客も、ワケのわかりにくいストーリーにつきあわされるのはイヤなのかなと、つい思ってしまう。製作費をちゃんと回収できるのかどうか、人ごとながら少し心配なところ……？

2004(平成16)年8月17日記

ミニコラム

SHOW-HEY 少年のヒーロー 『スーパー・ジャイアンツ』

スパイダーマンやバットマンなど、最近はやりのアメリカンコミックの原形はスーパーマン。これはかつて日本にもあった。

それは宇津井健を主演として新東宝が1957～59年に製作した『スーパー・ジャイアンツ』全9作シリーズ。

56歳となった私は今ではいろいろと小難しい映画評論を書いているが、1957年当時8歳の可愛い SHOW-HEY

少年は、両手を広げてカッコよく空を飛ぶ宇津井健＝スーパー・ジャイアンツの姿とその活躍ぶりにワクワクし、感動していたものだ。

今どきの人は誰も知らないだろうが、もし読者の皆さんの中にこの『スーパー・ジャイアンツ』を同じ頃に観て感動した人がいれば、是非お声をかけて欲しいものだ。そしてあの時の感動をもう一度……？